

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成26年度研究開発実施報告書

研究開発領域

「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」

研究開発プロジェクト

「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と復興
力を高めるためのLODE手法の開発」

倉原宗孝

(岩手県立大学総合政策学部、教授)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の要約	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施項目・内容	2
2 - 3. 主な結果	3
3. 研究開発実施の具体的内容	4
3 - 1. 研究開発目標	4
3 - 2. 実施方法・実施内容	4
3 - 3. 研究開発結果・成果	21
3 - 4. 会議等の活動	38
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	40
5. 研究開発実施体制	40
6. 研究開発実施者	41
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	42
7 - 1. ワークショップ等	42
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	42
7 - 3. 論文発表	43
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	43
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	43
7 - 6. 特許出願	44

1. 研究開発プロジェクト名

都市部コミュニティを含めた自助による防災力と復興力を高めるためのLODE手法の開発

2. 研究開発実施の要約

2-1. 研究開発目標

本プロジェクトは、自助による防災力・復興力を高めるために、「要援護者の災害時救援と平時の見守り」という防災・福祉両面からの視点を通して、現場住民や福祉関係者等の防災意識醸成と連携体制づくりを促進するためのツールとして利用する、住民主体・参加型手法『LODE』の普及モデルを開発することを目的とする。

具体的には、複数のモデルコミュニティにおいて住民組織や地区社協等の普及の担い手となる関連団体と協働しながら、手法の体系化を実施し、実効性が高くかつ広く普及力のある標準的な手法の開発を目指す。

その達成すべき成果目標は次のとおりである。

- (1) コミュニティタイプ別標準的実施手法の開発
- (2) LODE実施・普及人材の育成方法とその検証
- (3) 各タイプ別実施方法を含めたLODE手法の体系化
- (4) 自助・互助力の向上を測るための、或いは自助・互助力の向上に有効と思われる指標等の開発
- (5) 個人情報の収集と管理方法に関する研究

本プロジェクトは、以下の観点において従来の類似手法とは全く異なる新しい手法・体系としてとりまとめることを目指す。

- 災害時のハザード等ハード面中心の検討ではなく、コミュニティにおける脆弱性ともいうべき要援護者の発見・認識・支援対応に焦点を当てた手法。
- 都市規模やコミュニティの形態に関わらず取り組むことのできる汎用性の高い手法であり、かつコミュニティ別のニーズにもあわせた細やかな対応が可能な手法。
- 住民組織、社協等福祉団体等が実施者、協働者となり、関連機関等の協力を得ることで、高度な専門家の手を借りずとも自力で推進・普及していくことのできる手法。

2-2. 実施項目・内容

(1) 被災地におけるヒアリング調査

本プロジェクトで研究開発するLODE手法の設計にあたっては、先行被災地（被災地としての“先輩”として）で、「もしあのとき事前にLODEのような取り組みをおこなっていたら」や「被災時点で大事だと考えたことや後悔したこと、現時点で大事だと考えることや後悔していること」等に関するヒアリング調査を行う。

LODEは、平成25年度に南部等の考案した原初型で試行されている。しかしながらそれらは“多くの人命が犠牲になるほどの大災害をまだ経験していない”地区、大都市部地区での試行であった。それゆえ大規模災害被災地ならではの、地方や郡部ならではの視点

に不足があってはいけない。

この被災地調査はそうした“視点の抜け落ち”をカバーするために実施する。

(2) 「第一次試行手法」検討のためのプレ試行調査

机上の計画だけで第1次試行調査の設計を行うのではなく、第1次調査のプレ段階としての現場試行調査を踏まえることがベターであることから、25年度南部美智代等が取組んだ原初型LODEをベースに、プレ段階としての現場試行調査を行う。

対象地区としては、地元の協力体制（社協、地域団体、行政他）が既にととのっている地区が考えられ、具体的には大都市周辺都市の中小都市である伊丹市、地方都市である鈴鹿市等が候補である。

このプレ調査による調査結果は(3)の第1次試行調査の設計に反映させる。

(3) プロジェクト合同会議による「第一次試行手法」の設計

(1)及び(2)の調査結果を参考にしながらモデルコミュニティにおいて試行する「第一次試行手法」の設定を行う。

- ①コミュニティタイプ別実施手法
- ②LODE実施・普及人材の育成方法
- ③自助・互助力の向上を測るための、或いは自助・互助力の向上に有効と思われる指標等
- ④個人情報の収集と管理方法に関する調査方法

2 - 3. 主な結果

(1) 被災地におけるヒアリング調査

平成26年12月に、宮城県女川町、同気仙沼市、岩手県大槌町の3箇所の仮設住宅団地を訪問し、仮設住宅住民の方の声をうかがう機会を得た。

(2) 「第一次試行手法」検討のためのプレ試行調査

平成26年10月～平成27年3月までの間に、計8カ所の現場において、8回のプレ試行調査を実施した。

一般地区は伊丹市せつよう地区(26年10月)及び伊勢市宮崎連合町内会(27年1月)並びに精華町(3月14日)の3カ所、マンションコミュニティの場は伊丹市サン伊丹駅前ハイツ(27年2月)の1カ所であった。また、子ども向けLODEの研究を狙いとしたのが鈴鹿市長太小学校(26年10月)、知多市教員研修会(26年11月)、箕面市萱野地区(27年2月)、そして伊丹市昆陽里地区(27年3月)の計4カ所だった。

(3) プロジェクト合同会議による「第一次試行手法」の設計

(1)及び(2)、さらには追加調査としての「障害者施設等へのヒアリング調査」などの結果を踏まえ、平成27年度に実施すべき第一次試行調査の手法の検討を行った。

3. 研究開発実施の具体的内容

3 - 1. 研究開発目標

本年度の取り組みにおいて掲げた研究開発目標は、2 - 1で述べた内容と大きく異なる点はない。

しかしながら、26年度 of 取組み・検討の中で、研究開発を目指す「標準的手法」の骨格を、ワークショップ運営手順だけでなく、その計画・準備段階からの過程はもちろんのこと、手法の背景にある理念や精神の明確化等を含めた総合的なものとして意識すべく、次のような骨格図を示すこととした。

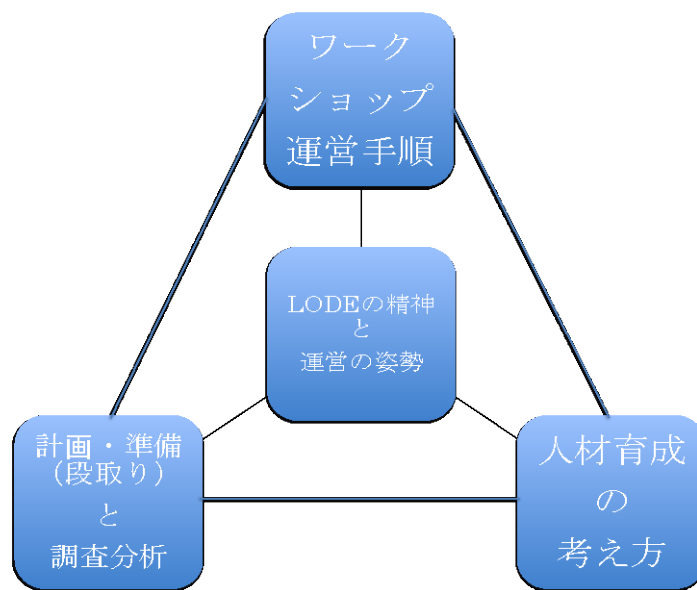


図1：研究開発を目指すLODE手法の骨格

3 - 2. 実施方法・実施内容

平成26年度半年間の研究開発の取組みの流れを次頁図に整理した。

平成27年度に実施する第一次試行調査のための仮説をつかむための取組みであった。

モデル地区でのワークショップ運営手順（マニュアル）づくりだけでなく、防災活動の柱となるマインドや、企画・準備段階や人材育成に至るまでの流れを含む手法としてのLODE手法を目指すための第一歩であった。

「市民に感動してもらえなければ、その手法の普及は難しい」、「参加者に感動してもらえる手法になるためには何が必要なのか」、「まずは焦らずにじっくりと現場を観察する」等々の認識や姿勢を大切にしながらの半年間であった。

6頁～20頁の(1)～(3)において、各取組みの内容を報告する。

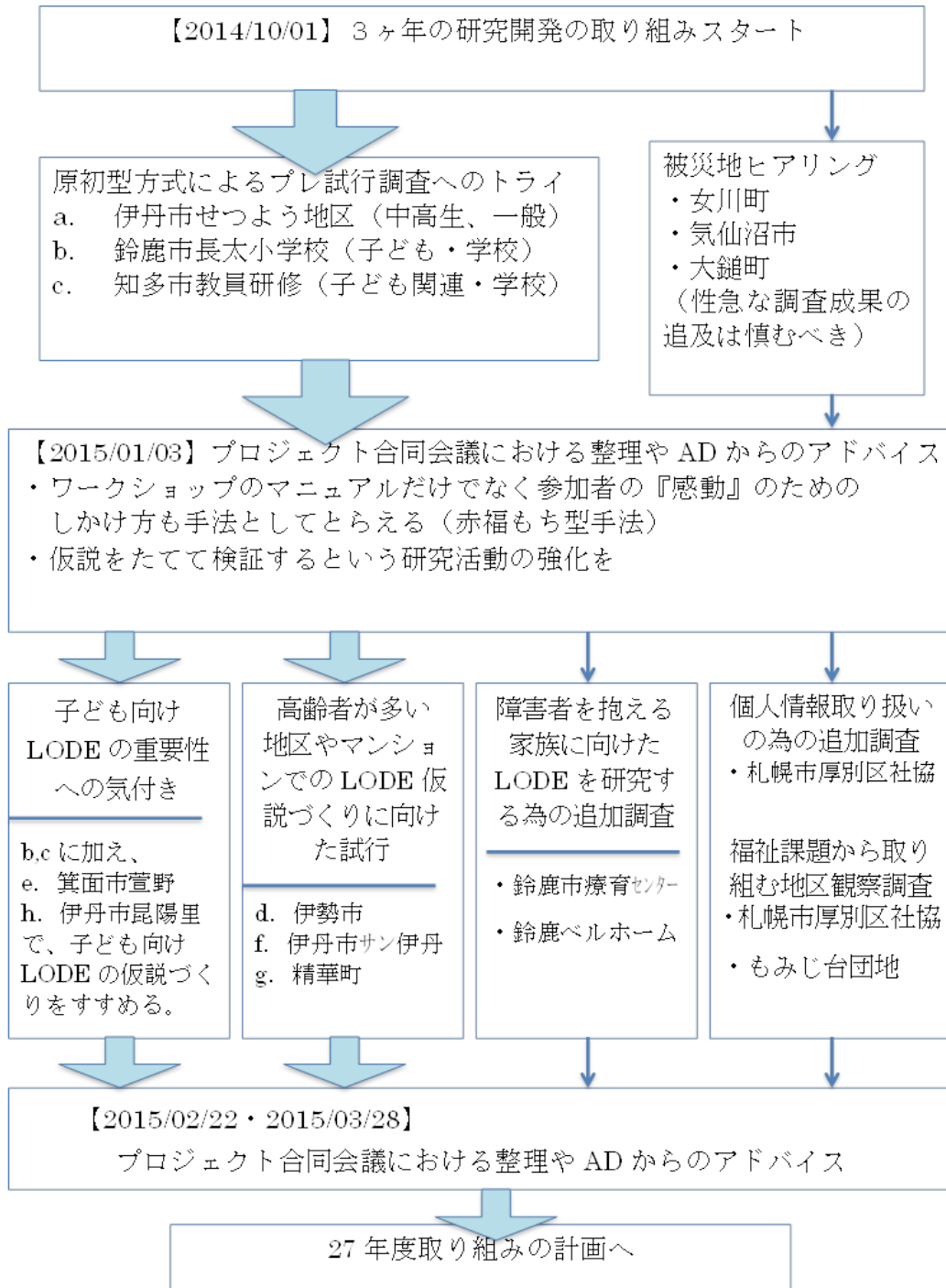


図2 平成26年度取り組みの流れ

(1) 被災地におけるヒアリング調査

被災地ヒアリング調査の最大の目的は、LODEの研究開発調査において、抜け落ちてはならない視点が無いかどうかをチェックすることにあると考えている。

今年度は、次の表に示すように、宮城県女川町、同気仙沼市、岩手県大槌町の3箇所の仮設住宅団地を訪問し、仮設住宅住民の方の声をうかがう機会を得たが、当プロジェクトチーム側のLODEの研究開発状況はまだ緒に就いたばかりで、深く切り込んだヒアリング調査の実施には至らなかった。

しかしながら、複数の方から「震災から3年以上経過して、少しずつ人に話したいと思うようになってきた」とか、「震災直後から復興まちづくり計画に対して様々な意見を出してきたが、3年以上経つと自分の意見が時間の経過とともに変わってきていることに気がつく。短期間で住民意向を集約するまちづくり計画は本当に正しかったのだろうか」などの本音の一部を拝聴することはできた。

住民の方々の本音は、南部が震災後数何度もの訪問を重ねてきたことで信頼を得ている団地であることによるものと思われる。

したがって当プロジェクトのLODE研究開発に資するヒアリング調査に関しても、26年度だけで完了できるものではなく、今後も時間をかけ機会を重ねて行うべきであろう。

表1：被災地ヒアリング調査先一覧

訪問日	訪問先	内容
2014.12.21	宮城県女川町新田仮設住宅	仮設住宅の集会室でお餅つきをして、住民の方々のお話をうかがう会を開催した。
2014.12.21	宮城県気仙沼市面瀬中学校仮設住宅	仮設住宅の集会室でお茶会をして住民の方々のお話をうかがう会を開催した。
2014.12.21 ～ 2014.12.22	岩手県大槌町吉里吉里地区仮設住宅	仮設住宅の各戸を訪問し、お餅を配布するとともに、集会室でのお茶会への案内をして、その後集会室でお話をうかがうお茶会を開催した。

(2) 「第一次試行手法」検討のためのプレ試行調査

26年度の半年間では、27年度に実施する「第一次試行調査」の実施方法を検討するために、その事前情報を得るためのプレ試行調査を行った。

プレ試行調査は、8箇所の現場において10月～3月まで計8回実施したが、以下にその狙いや実施概要、経緯や準備の状況などを整理する。

①プレ試行調査対象地区のタイプや狙い

表2では対象地区のタイプや狙いを整理した。

主として要援護者の中で「子ども」をクローズアップした対象地区が4カ所、高齢者が中心の地区が4カ所であった。

また、マンション単独での地区は1カ所で、その他は戸建住宅中心地区か戸建てとマンションとの混在地区であった。

表2：プレ試行調査実施地区一覧

記 号	実施 年月日	実施団体 (都市・会 場)	参加 人数	調査目的1 (要援護者タイプ)			調査目的2 (地区タイプ)		調査 地区 エリア
				子ども LODE を考 える ため	高齢者 LODE を考 える ため	障害者 LODE を考 える ため	マンシ ョン等	一般住 宅地ま たは混 在地区	
a)	2014. 10.07	伊丹市せつ よう地区住 民団体 (伊丹市人 権啓発セン ター)	45人		○		○	○	小学校 区域 程度
b)	2014. 10.23	長太小学校 4年生 (鈴鹿市立 長太小学 校)	46人	○				○	小学校 区域
c)	2014. 11.20	知多市学校 教員研修会 (桑名市役 所：教育委 員会会議 室)	15人	○				○	全市域 (仮想)
d)	2015. 01.12	宮崎連合町 内会 (伊勢市岡 本長：宮崎 連合会館)	35人		○			○	連合町 内会エ リア
e)	2015. 02.07	萱野地区 (箕面市萱 野：萱野人 権センタ ー)	小人 15人 大人 5人	○			○	○	小学校 区域 程度
f)	2015. 02.22	サン伊丹駅 前ハイツ自 治会 (伊丹市有 岡：サン伊 丹集会所)	25人		○		○		マンシ ョン 自治会
g)	2015. 03.14	精華町社会 福祉協議会	50人		○			○	全町域

		(精華町かしのき苑会議室)							
h)	2015.03.28	伊丹市昆陽里地区子ども団体 (伊丹市立昆陽里小学校体育館)	小人 55 大人 45人	○				○	小学校区域

②プレ試行調査各地区ワークショップの実施概要

ここではプレ試行調査を実施した8つの地区別に、実施時間、実施手順・内容、当日に係る考察、さらには実施に至る経緯や準備状況などを整理する。

a) 伊丹市せつよう地区

【所要時間】：165分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・社協：K氏・関学大：松田（進行補助）、倉原（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・LODEの意味の説明
- ・参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・「高齢者三種の神器（入歯、眼鏡、補聴器）箱」の説明と工作ワークショップ
- ・地区の地図ワークショップ（自宅、避難所、公衆電話、要援護者）
- ・「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・仮想マンションの立面図ワークショップ
設定：仮想の自宅、各要援護者、頼れそうな人や役員、非協力者等
マンション館内避難放送シミュレーション

【考察（評価・反省点他）】

- ・地区自治会関係役員・世話役メンバー90名のうち半数が出席。
- ・地元社協（司会を担当したK氏、他）との信頼関係によってスムーズな展開となった。
- ・ワークショップ終了後、数名の役員と社協職員、そして当プロジェクトチームスタッフで反省会を兼ねたミーティングを行った。
- ・役員のうち2名は社協の仕事を経験しているからか、取り組みの意義に関しての理解が深かった。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・平成25年度より活動連携している伊丹市社協地域福祉担当課K氏より、担当するせつよう地区で、地域福祉活動の世話役住民層を対象としたLODEワークショップの依頼があった。
- ・開催案内や会場準備は社協側が社協側が担当した。
- ・市行政からの協力は特段無い。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ・図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）

- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他
- ・ 高齢者三種の神器箱材料×人数分
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ ホワイトボード



写真1～3：プレ試行調査現場写真 a（伊丹市せつよう地区）

b) 鈴鹿市長太小学校4年生

【所要時間】：90分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・鈴鹿市職員3名（進行補助）、大西（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 班別に整列させる。
- ・ 子供達に南部の思い、姿勢の話をする。
- ・ ゲストの紹介（市役所の3名）
- ・ 子供達に質問「あなたにとって一番大事なものは？」（各自付箋に記入）
- ・ ストローハウスづくりワークショップ（準備から子供達にしてもらう）
- ・ 各ストローハウス作品の発表と評価
- ・ 高齢者三種の神器の話と、「高齢者三種の神器箱」のプレゼント
- ・ 子供達に「家に帰ったら家族に今日の取り組みのことを報告すること」と、宿題を伝える。

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 大人が真剣なことを子供に伝えることは大事。
- ・ 市役所の人や他都市からのスタッフが来ていることを子供達に伝えることで、子供達も場の大切さを感じたようである。
- ・ 子供達が大事だとしたのは「家族」であった。食料や水やお金よりも「家族が大事」と答えた子供が多かった。
- ・ ストローハウスづくりワークショップは、子供にとって楽しかったようだが、図上ワークショップと比べると地域防災学習としての意味は希薄であるかもしれない。
- ・ 学校という「教師によって押さえられる場」ゆえか、子供達は元気で素直だった。
- ・ 子供達からは事後に感想・感謝文が寄せられたが、着目すべきは、46名中29名（63%）の子供が「帰宅してから家族に学んだことを教えた」と書いていたことだ。子供を対象としたLODEの効果の一つは、ここにあるのかもしれない。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 南部は三重県内で非常に著名な防災ボランティアである。小学校側から4年生（2学級）

対象の特別講座の依頼が入った。

- ・ LODEが主な対象とするL（子供）対象の研究の場になると考え、補助者、記録者を従えて臨むこととした。
- ・ 南部の地元鈴鹿市では市行政からの協力度も高く、今回のように学校のようなステージで調査活動を行うことも可能となった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★ストローハウスワークショップ用材料
 - ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
 - ・ 「高齢者三種の神器箱」完成品×人数分
- ★子供達から南部への手紙用紙（事後、学校側で用意）

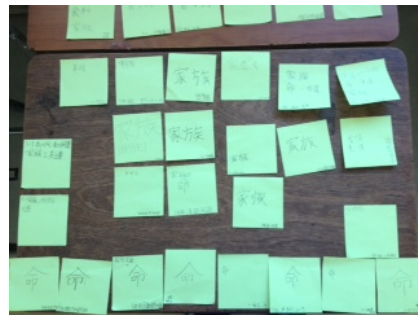


写真4～5：プレ試行調査現場写真 b（鈴鹿市長太小学校）

c) 知多市学校教員研修会

【所要時間】：90分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・大西（進行補助、観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 班分け（手話を使って誕生順に並ぶ）
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 参加者への質問「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・ 参加者への質問「避難所であるあなたが貢献できる得意技は？」
- ・ 図上ワークショップ（知多の方々のため、鈴鹿の地図を使用して各自が鈴鹿市民となって進めた）。
- ・ 津波が来る想定で、図上避難のシミュレーションを行った。

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 子どもを対象としたLODEの実施に際して、「学校」が使えるのかどうかの手応えを得るための場として位置付けたが、公立学校教員の防災教育に関する意識の低さを目の当たりにすることとなった。子どもを対象としたLODEの実施において、学校教員はあまり役に立たないかもしれない。
- ・ 質問事項をポストイットに記入する際に、周囲の人の回答を覗き見て（カンニング）同じような回答を記入しようとする教員が少なくなかった。平面図ワークショップにおいても、自分自身の考え方を自信を持って発表するような参加者は少なかった。おそらく「他人と横並びでいたい」、「間違っはいけない」という意識が強いのではないかと

想像される。

- ・ 宮城県大川小学校の悲劇の原因のひとつがここにあるのではないかと感じた。
- 【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】
- ・ 知多市の公立小学校教員（過去に南部の防災講座に参加した経験あり）から、三重県への教員研修旅行の行程の中で防災ワークショップを体験させて欲しいと依頼が入った。
- ・ LODEが主な対象とするL（子供）対象の研究の場になると考え、補助者、記録者を従えて臨むこととした。
- ・ 会場は先方で準備することとなった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他



写真6～8：プレ試行調査現場写真 c（知多市学校教員）

d) 伊勢市宮崎連合町内会

【所要時間】：100分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・大西（進行補助）、倉原（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 南部から挨拶
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 「高齢者三種の神器（入歯、眼鏡、補聴器）箱」の説明。赤ちゃんを泣き止ます保冷剤入れやIDD（I型糖尿病）処方箋入れにも役立つことを説明。
- ・ かつての伊勢湾台風、13号台風の話
- ・ 図上ワークショップ（自宅、避難所）
- ・ 「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・ LODEの説明
- ・ 再び図上ワークショップ（公衆電話、一人暮らしお年寄り、寝たきりお年寄り、赤ちゃん、障がい者）
- ・ 参加者からの「空き家が多い」の声に対応して空き家の図示も指示
- ・ 地震・津波情報の仮想に基づく避難ルート図示

- ・ 過去の大地震・大津波の記録の話（伊勢に関連する話題として）
- ・ 高齢者三種の神器箱のプレゼント

【考察（評価・反省点他）】

- ・ コーディネーターが当該地区のことを褒める話術は大切。
- ・ 図上ワークショップの最中に、参加者から「空き家が多い。夜電気が付いていなくて分かる」と、この地区課題の指摘があった。今回の空き家記入は有効だと思われる。現代社会を反映しており地区状況がよく分かる。当該地区では空き家が多くて白シールが足りなくなる場面もあった。
- ・ 参加者はほとんど高齢者であったが、外宮至近の位置にある非常に歴史のある地区にふさわしく、住民たちは過去の歴史的災害や地区の課題にも明るく、図上ワークショップに取り組む際も浮ついた雰囲気は皆無であった。
- ・ ワークショップ終了後は、連合町内会長、防災担当役員たちと反省会を行ったが、南部を筆頭とする当プロジェクトチームへの信頼は厚くなったようで、次年度再度実施の要請があった。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 南部は三重県内で非常に著名な防災ボランティアである。伊勢市外宮地区の連合町内会から防災講座の依頼が入った。
- ・ 当ワークショップ実施にあたって伊勢市や三重県行政からの協力などは無かった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

★地域図（A全版）×テーブルの枚数

- ・ マイクとホワイトボード
- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分



写真9～11：プレ試行調査現場写真 d（伊勢市宮崎連合町内会）

e) 箕面市萱野地区

【所要時間】：180分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・森本・藤本・大西（進行補助）、倉原・大西（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 高齢者三種の神器の説明。1型糖尿病の子どもの話。

- ・ 「あなたの大事なものを入れる箱」の工作ワークショップ
- ・ 「ほのぼの灯」の工作ワークショップ
- ・ 「ほのぼの灯」の消火の仕方の質問
- ・ 「近所の高齢者に神器箱プレゼントして」の話。
- ・ 「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・ 図上ワークショップ（自宅、避難所、おじいさん、おばあさん、公衆電話）
- ・ 参加者への質問「この地区の危険って？」→危険箇所の図示（水、塀）
- ・ 犬、猫の図示
- ・ 避難所での物資分配シミュレーション
- ・ 「鈴鹿子ども防災サミット」での細街路実地調査の話。
- ・ 実際の防火水槽や消火栓の場所を確認するために屋外に調査に出かける。
- ・ 再び図上作業で避難ルートを図示
- ・ 新聞スリッパづくり
- ・ 防災紙芝居実演
- ・ 感想と質疑応答

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 一人の女の子が、大切な宝物はこの箱（神器箱）には入らない。抱き人形からと。でも、この箱に入らないもっと大事な一番の宝ものがある、それは「かぞく」と彼女は書いていた。
- ・ 「大切な宝物」を一つ考える時間、経験は重要、有効だろう。また、子どもたちは大人では思いつかないものを記してくれる。
- ・ 「ほのぼの灯」の消火の仕方の質問は学校で学んだことを生かす質問として有効。
- ・ この地域は住民同士のコミュニケーションが豊かなようで、子ども達もお年寄りと一緒に作業に取り組んでいた。
- ・ 避難ルートを考えるとき、防災だけでなく防犯課題を付加することも有効だった（変な人が居そうなところは避けて逃げて等の指示を出した）。
- ・ 現地探索に出かけることは有効。
- ・ 子ども達からの感想の声からは非常に好評だったことがわかる。お世辞ではなく、真剣な声だった。
- ・ 普段から地域NPOや自治会の大人達とコミュニケーションをしている子供達ならではの意識の高さだろうと感じた。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ b) の長太小学校とc) の教員対象調査だけでは子どもを対象としたLODEの調査研究に不足であると判断し、子ども対象現場を探すこととした。
- ・ 研究メンバー藤本の関係先のNPO（箕面市）から、指定管理する施設がある萱野地区で子ども対象の防災講座を開催したいという要望が上がり、当該地区での実施を企画することとなった。
- ・ 今回のワークショップ調査では地元行政との関係は特段発生していない。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ・ マイクとホワイトボード

- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他
- ・ 高齢者三種の神器箱材料×人数分
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ 「ほのぼのの灯」実験セット×人数

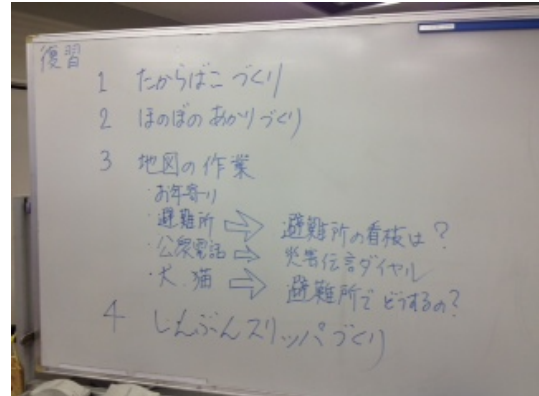


写真12～13：プレ試行調査現場写真 e（箕面市萱野地区）

f) 伊丹市サン伊丹駅前ハイツ

【所要時間】：150分

【当日スタッフ】

南部・橘・社協：K氏（進行）、森本・藤本・大西（進行補助）、倉原・延藤・大西（観察、記録）、延藤（まとめ）

【実施内容・手順】

- ・ 開始時間までの集合状況が芳しくなかったため、急遽「お餅とぜんざいの振る舞い」をワークショップの冒頭にもってきた。
- ・ 挨拶（自治会長）
- ・ サン伊丹での活動がここまで来るに至った来し方の説明（社協K氏より）
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 高齢者三種の神器、赤ちゃんのための保冷剤の話
- ・ LODEの説明
- ・ 要援護者についての説明（パワポ）
- ・ A棟2班、B棟3班に別れての図上ワークショップ（まずは世帯名の記入のない図で）
- ・ 次に世帯名の入った図でワークショップ。
- ・ 5年後LODE（心配な人、頼れる人）
- ・ さらに班同士で図面を交換しての作業。
- ・ 障害の方の避難についての質問
- ・ 乳幼児アタッチメントを活用した防災頭巾づくりの説明と提案
- ・ アドバイザーよりコメント
- ・ 研究協力者延藤安弘氏によるワークショップのまとめの言葉と板書「ほっとかへんで」

【考察（評価・反省点他）】

- ・ まず「食」から始めたことで、参加者がリラックスできる効果があったようだ。
- ・ 今回、社協のK氏がスタッフの一人としてWSに至った経緯の説明役を担った効果は大きいと思われる。K氏自身が育成された人材のモデルでもある。
- ・ 同じ棟（対象）なのに女性が多いグループは情報量が多い。男性グループは少ない。
- ・ 5年後LODEでのピンク凡例（危ない人）のシールの枚数から、「危ない＝亡くなる人」と受け取ったグループもあるほど高齢化の危機感があるようだ。
- ・ 同じ棟でも班によって情報が異なる。
- ・ 各グループとも回覧板が回る範囲（自分たちの班）の情報には一定のものがあるが、それ以外は知らないとの声が多い。
- ・ 互いの情報の評価作業は有効だと思われる。
- ・ 低層階からの参加者が多く、高層階からの参加者が少ないようだ。
- ・ 参加者からは、「こうした情報をどう残していくか、蓄積していくかが課題」として指摘された。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 平成26年2月と3月にマンション用LODEを開催した伊丹市有岡「サン伊丹駅前ハイツ（171戸）」の自治会長N氏より橋のところに、1年経過後のLODE実施の依頼が入った。
- ・ N氏、伊丹市社協K氏と連絡を取りながら、当日のプログラムや企画の検討を行った。
- ・ 参加者がリラックスするようにと、「ぜんざいコーナー」を設けることとした。
- ・ 25年度の有岡地区全体での取り組みから始まってサン伊丹の取り組みがあること、社協などが一体的となった活動であることを理解してもらうために、当日K氏から参加者に説明してもらうこととした。
- ・ 伊丹市行政からの関与、協力などは特別無かった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★ ぜんざい・焼き餅の材料とコンロ、簡易食器など
- ★ この地区の取り組み経過を説明するためのパワーポイント資料とプロジェクター（伊丹市社協が準備）
- ★ 「要援護者」の説明のためのパワーポイント資料
- ★ マンション立面戸割図（A全版）×各棟別×表札有無タイプ別×テーブルの枚数
 - ・ マイクとホワイトボード
 - ・ 図上ワークショップの凡例表（各テーブル分）
 - ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
 - ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
 - ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
 - ・ 筆記用具他
 - ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
 - ・ 乳幼児アタッチメントを材料とした障害者向け防災頭巾の見本

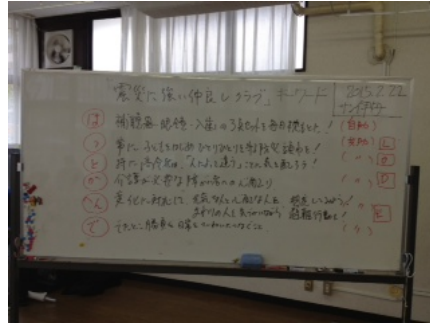
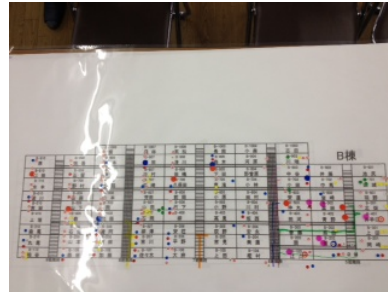
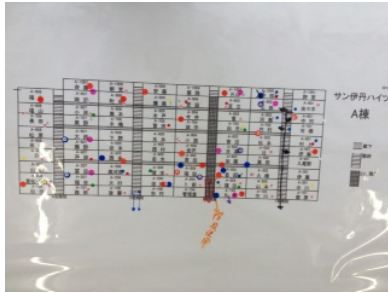


写真14～17：プレ試行調査現場写真 f (伊丹市サン伊丹駅前ハイツ)

g) 京都府精華町社会福祉協議会

【所要時間】：120分

【当日スタッフ】

南部(進行)、社協：H氏・南部雅幸・橘(進行補助)、橘(観察、記録)

【実施内容・手順】

- ・ 地区エリアが全町エリアとあまりにも広がったことから図面を利用したLODE実施は見送り、参加者たちのモチベーションを高めるための「プレLODE」を実施した。
- ・ 参加者への質問「自助とは？」(各自付箋に記入)
- ・ 「高齢者三種の神器(入歯、眼鏡、補聴器)箱」の説明と工作
- ・ 要援護者に関する説明(避難者千人のうち、要援護高齢者50人、要援護子ども50人、要援護障害者50人)
- ・ 避難所で活躍する「新聞スリッパ」工作

【考察(評価・反省点他)】

- ・ 中高年の男性参加者たちが文句も言わず「高齢者三種の神器箱」や「新聞スリッパ」づくりなどの作業に取り組んだ。
- ・ これは講師を務めた南部の言葉に共感、感動したことによると思われる。
- ・ 質疑応答で南部のモチベーションの原点を尋ねる質問が出たが、それに対する回答を聞いて、参加者たちの感動、満足は一層強くなったと思われる(アンケート調査でも確認できた)。
- ・ 人を動かすには「感動」が肝腎だということを改めて確認する機会となった。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 関西地区の福祉関係行事で、南部の講演や伊丹市社協の発表(平成25年度に南部たちと取組んだ防災と福祉ワークショップ等)を聞いた精華町社協地域福祉担当のH氏から防災講座の依頼が入った。

- ・ 12月に事前企画会議を実施し、3月に講座を開催することとなった。
- ・ 全町域を対象として募集したいとのことで、地域の地図を使った図上ワークショップではなく、防災に関するモチベーションを上げる目的の講座とすることとした。
- ・ 社協が事務局を務める「精華町災害ボランティアセンター」が主催者となったが、町行政からの特段の関与は無かった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ・ マイクとホワイトボード
- ・ LODEの説明用簡易パンフレット（人数分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他
- ・ 高齢者三種の神器箱材料×人数分
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ 新聞スリッパ製作用古新聞（一人あたり新聞紙2枚または4枚）
- ・ 乳幼児アタッチメントを材料とした障害者向け防災頭巾の見本
- ・ 参加者感想・アンケート（社協で用意）



写真18～22：プレ試行調査現場写真 g（精華町社会福祉協議会）

h) 伊丹市昆陽里地区子ども団体

【所要時間】：120分

【当日スタッフ】

南部・橘（進行）、森本・藤本・社協2名・実施団体3名（進行補助）、倉原・大西（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 班分け（5つの小地区別に子ども班、大人班に分ける）
- ・ グループリーダー指名（誕生月で）

- ・ 質問「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・ LODEの紹介と説明
- ・ 図上ワークショップ（避難所、公衆電話、障がい者、外国人、赤ちゃん、妊婦さん、寝たきりの人、犬、猫、自分の家）
- ・ 自宅から学校までの通学所要時間の質問
- ・ 避難ルート記入
- ・ 机の下に身を隠す訓練（ダンゴムシのポーズ）
- ・ 新聞スリッパづくり
- ・ 「高齢者三種の神器箱」の説明とプレゼント

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 子どもだけの班と大人だけの班とに分けたが、各班の中に子どもと大人の両方が居る構成の方が適していたかもしれない（eの箕面市との比較で）。
- ・ スポーツクラブのユニフォームを着た子どもが大半であったが、私服による参加の方がワークショップとしては集中度が高まったかもしれない。
- ・ 自宅の住所、電話番号を知らない小学生が少なくない（これは伊丹市だけの傾向ではないようだ）。
- ・ 「高齢者三種の神器箱」という関連グッズは、子どもにはもうひとつインパクトを与えられない。子供向けLODEに使える小道具類を開発する必要がある。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 子供を対象としたLODEの研究に不足であると判断し、子供対象現場を探すこととした。
- ・ 橘から活動連携先の伊丹市社協地域福祉担当K氏にお願いし、伊丹市内で最も活動力がある子育て団体「スポーツクラブ21こやのさと」の紹介を受けた。
- ・ 同団体との企画会議を経て、小学校の体育館を借切り防災ワークショップを開催することとなった。
- ・ 実施当日、社協からの出席要請を受けた伊丹市危機管理室職員も出席した。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

★地域図（A全版）×テーブルの枚数

- ・ マイクとホワイトボード
- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ 新聞スリッパ製作用古新聞（一人あたり新聞紙2枚または4枚）



写真23～25：プレ試行調査現場写真 h（伊丹市昆陽里）

(3) 「第一次試行手法」検討のための追加調査

「第一次試行手法」検討のためには、(2)で報告した8回のプレ試行調査だけでは不足する部分を補う調査を実施する必要性が生じた。

そこで、次の表に示すように3つの追加調査を実施した。

まず、8回のプレ試行調査で一度も実施する機会が無かった「障害者を対象としたLODE」の研究を進めるために、重度障害者のデイサービス施設や発達障害児などが利用する療育センターの責任者（鈴鹿市療育センター所長）を対象としたヒアリング調査を行った。

さらに、個人情報の取り扱い問題に関しては、国内でも先進地の一つである札幌市社会福祉協議会の事例を学ぶべくヒアリング調査を行った。

また、今年度の8回のプレ試行調査現場では、社協がコーディネートした伊丹市での取り組みを除くと「防災」に主眼が置かれた現場であったが、今後は、「福祉目的からLODEを実施しその成果として防災力も高めようという福祉課題先行地区」でのLODE採用についても働きかけていく必要がある。このため、地域見守り体勢づくりのために平成25年度からLODEの取組みにチャレンジしている札幌の団地自治会の状況についても観察調査を行った。

表3：「第一次試行手法」検討のための追加調査実施概要

追加調査の目的	a)調査対象 b)調査方法 c)調査時期	調査結果 と 今後の研究開発への活用
①障害者を対象としたLODE検討のため	a)鈴鹿市療育センター及び障害者施設「鈴鹿ベルホーム」 b)所長及び責任者へのヒアリング c)2015年1月28日、3月27日	<ul style="list-style-type: none"> ●重度の障害者は震災時の停電や薬剤入手困難等によって生命の危機に瀕する。親の中には震災が発生したら諦めなければならないと途方にくれている人も少なくない。行政の支援には限界がある。よって、こうした障害者を抱える親たちと避難行動や「施設の緊急福祉避難所づくり」等を計画するための取組みが求められる。 ●一方、発達障害児の中には、「火災に向かって飛び込んでいく可能性を持つADHD児」や、「避難行動時に座りこんで動かなくなるASD児」などもある。こうした子供たちを抱える親とは、親子一緒にでの避難訓練や、上記でも述べた「施設の緊急福祉避難所づくり」等を計画するための取組みが求められる。 ●次年度は、試行調査の中で、これら課題にも取り組んでいく必要がある。
②個人情報の取り扱いについて	a)札幌市厚別区社会福祉協議会 b)事務局長及び事務局次長へのヒアリング c)2015年2月20日	<ul style="list-style-type: none"> ●地域福祉現場における個人情報の取り扱いに関して、札幌市及び札幌市社協は、全国の先進地のひとつともいえるべき取組みを行っている。 ●『福まち活動の手引き（個人情報の取り扱い編、地域福祉マップ編）』という2冊のマニュアルを作成した上で、社協が自治会等の地域福祉活動団体に対して個人情報の取り扱い方等に関する講

		<p>習を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●加えて札幌市社会福祉協議会の顧問弁護士によって、地域福祉活動における個人情報取り扱いに関する講習も開催されている。その弁護士作成資料で整理されている内容は、『災害時における高齢者・障害者支援に関する課題（日本弁護士連合会編）』で著述されている内容とほぼ同じ向きのものであり、国民のみならず多くの自治体、公的機関までもが個人情報保護に関する理解不足からか過剰反応状態に陥っていると指摘している。 ●27年度は、第一次試行調査の中で、LODEとしての個人情報取り扱いマニュアルの作成に着手するが、引き続き札幌市以外の事例も調査し、より充実した内容のものを目指す必要がある。
<p>③地域福祉課題からアプローチしている地区に関して</p>	<p>a)札幌市厚別区社会福祉協議会及び札幌もみじ台団地第二もみじ自治会 b)活動の観察調査 c)2014年10月18日、11月15日、12月20日、2015年1月17日、2月21日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●札幌もみじ台団地第二もみじ自治会は、厚別区社協の支援を受けながら、団地の見守り活動を組織化しているが、その活動の強化に貢献していると思われるのが、平成25年度に実施された原初版のLODEである。 ●その後同自治会では、「札幌市民は防災意識が高くないので、防災テーマだけで活動は続けていけない。楽しみながらコミュニティづくりに役立つ手立てが必要だ」と考え、南部のアドバイスの下、『縁側サミット』という主婦の創作活動を取り入れたが、これが功を奏し活況の様相を呈している。この『縁側サミット』では、作品のひとつとしてLODEワークショップでも使用される『高齢者三種の神器箱』の製作も行っている。 ●「声高に叫ぶ防災」だけでなく、「ゆるやかに防災に関わる手立て」として、こうした手法の有効性があると思われる。これは3-3や3-4でふれている『赤福もち型手法』に相当するものだと考えられる。 ●今後、中高年齢女性層が多い現場で活用・提案できる可能性を有している。

(4) プロジェクト合同会議による「第一次試行手法」の設計

次年度試行する調査の仮説設計作業は、プロジェクト合同会議や、コアメンバーミーティングによって進められた。

検討の流れや成果については、次の3-3で述べる。

3 - 3. 研究開発結果・成果

(1) LODEの目指すところの確認

調査のための研究事業に陥らないために、常にLODEが目指すところを確認しておくことが重要である。

③や④に意識が行くことは当然であるが、①や②を忘れては形骸的な取り組みに陥る危険性がある。そこを意識した研究開発が重要である。

- ①住民一人一人の自助力を上げる。
- ②とりわけ要援護者（家族含む）の自助力を上げる。
- ③コミュニティの共助力をあげる。そのために住民の互いが情報を提供し合い、その共有を図る。
- ④そのために要援護者情報（LOD情報）をあぶり出し、その共有を図る。

(2) LODEの体系化案

①基本LODE

マンションの自治会単位や住棟単位、一般住宅地区の単位町内会（場合によっては班単位）等、民生委員1人あたりの担当エリア程度（200戸～数百戸程度）を念頭に実施するLODEを「基本LODE」として位置づける。

②補完LODE

町内会や自治会、マンション管理組合等が取組む「基本LODE」で、全ての住民の参加を得たり情報を把握することは不可能である。実際には子どもや障害者、さらには要支援・要介護高齢者、そして若い世代の住民等の参加や情報が不足しがちである。

「基本LODE」だけの実施では漏れることの多い子どもや障害者、要支援・介護高齢者等の自助力・共助力向上に向けて、「子どもLODE」、「障害者と家族のLODE」等、基本LODEを補う「補完LODE」として必要に応じて実施する。

③予備LODE

LODEを広く普及し、「基本LODE」や「補完LODE」の実施主体を掘り起こしていくために、LODEを説明し広めていく機会が重要となる。

これを「予備LODE」と位置づけ、自治体全域や学校区全域等、広いエリアを対象に、防災活動やLODEへの取組み意欲を喚起するために実施する。

表4：LODEの体系化案（概略）

LODEのタイプ		対象・エリア	狙い
予備LODE		自治体全域、学校区、連合町内会	・基本LODEに取組む必要性、重要性をより多くの住民にアピールする
基本LODE (今LODE及び5年後LODE)		単位町内会・自治会、及び班、マンションの組合等	・住民一人一人の自助力を上げる ・共助意識醸成と要援護者情報共有 ・将来の守り手育成意識の醸成
補完LODE (一部)	子どもLODE	学校区など	・子ども個人個人の自助力を上げる ・親（子育て世代）の関心を惹きつける
	障害者LODE	全市・全町域、療育センター・障害者センター等の対象エリア	・障害者家族同士のネットワーク構築 ・私設避難所設置能力養成 ・一般住民への周知

(3) 第一次試行調査の実施手法骨格案

26年度取組みの成果は、第一次試行調査のための実施手法案である。

まず最初に、全体の骨格図を示すが、この手法案の特徴は、「ワークショップの手順マニュアル」だけではなく、「LODEを開発した心、精神を伝え守る方法」、「LODEを伝え普及できる人材を育成する方法」が一体となったものを目指すところにある。

図中の各内容に関しては、①～⑥で述べる。

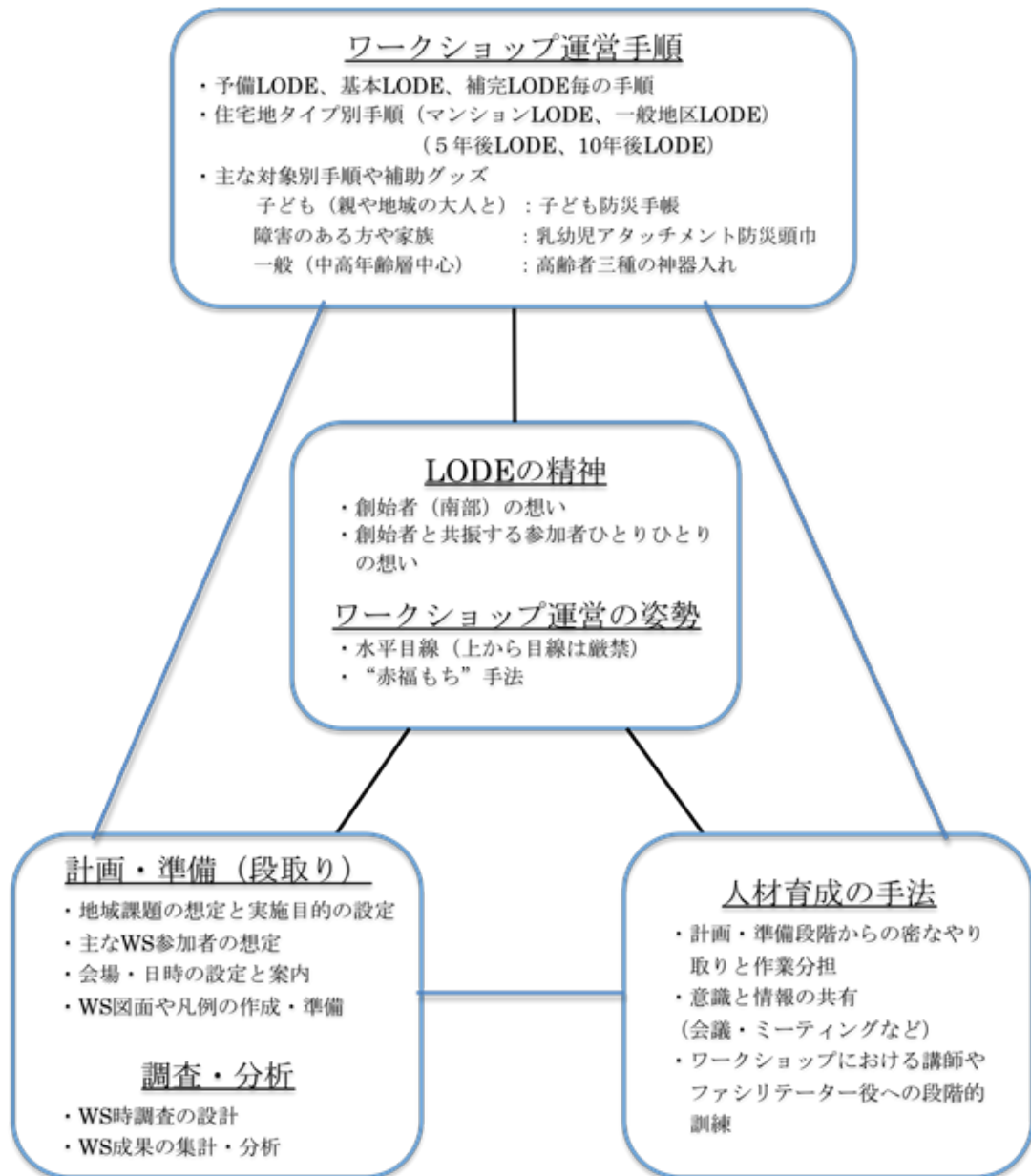


図3 : LODE手法の骨格

① LODEの精神

LODEの精神、ミッションとは、L、O、Dの文字にこめられたように、災害時に弱者となる方々（子ども、高齢者、障害者等）を支援すること、そして災害時だけでなく平時においてもこうした方々を見守るコミュニティをつくることといえる。

しかし、その背後には、20年前の阪神大震災後DIG（ディグ：災害凶上訓練ゲーム）の原初型を発案した南部等災害ボランティアたちの思いがある。その思いを多くの市民・国民に伝えていくことがLODEの手順を普及させること以上に重要だ。

そしてそれは「愛」、普遍的な隣人愛だろう。

当プロジェクトがスタートした26年10月、特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿副理事長の杉本（本プロジェクトの研究メンバーではない）から、「どのようなマニュアルを作ろうが、参加者に感動を感じてもらえないものなら、それは普及しない。最大の研究開発課題は“感動してもらうためにはどうすればいいのか”だ」との意見が寄せられたが、以来この言葉が当プロジェクトの最重点課題となった。

事実、3月14日、精華町での現場で、質疑応答の際に参加者から次のような質問が上がった。「南部さんの思いに感動した。他の防災講座とは全く次元が違う。南部さんの思いの背景にある経験やきっかけを知りたい」と。

会場の全員の前で発言するかしないかの違いはあるが、他の現場においても同様な内容の感想と「また参加したいので一度で終わらずに是非続けて開催してください」と希望を伝える参加者は少なくなかった。当プロジェクトの中心的メンバー南部のワークショップ進行や発言が参加者に対して感動を与えていることは確かなようだ。

なお、参考資料として精華町（27年3月14日）で寄せられた参加者の事後感想を次に紹介する。

- ・ 非常に役立つ講座内容で、時間が短く感じました。
- ・ 災害が起きた際の現状を想像させるような内容でした。
- ・ 女性ならではのこまやかな心配りを感じる。または、防災に対する意識を高揚させる実務的な内容だと感じました。
- ・ 上っ面の話しではなく実践に即した内容でためになった。
- ・ メガネ・入れ歯・補聴器の話し。避難場所の確認ができた。
- ・ 非常にわかりやすく説明していただき良かった。三種の神器を地域の高齢者に進めたいと思います。
- ・ 自治会、自主防災会の活動の取り組みがどうあるべきか検討していきたいと思います。
- ・ 身近に思えてよかった。
- ・ 自分の命は自分で守るということで、まず家庭にて家族で防災を他人ごとにしないうで常日頃から頭に入れておく。
- ・ 木津川上流の高山ダムが地震等で破損した時は精華町には何分くらいで水が到着するか、その時の水量の高さを防げるのか。
- ・ 南部さんの話しは身近に役立つ防災ということでとてもよかった。毎日、毎日、今日一日何もなくて過ごせてよかったと思えるような生活をしていきたい。
- ・ ちょっとしたことでもいろんなものができるのはおもしろい。
- ・ 生活に密着した身近な事例で目からうろこでした。
- ・ 足元の取り組みの大切さがわかった。
- ・ 先生のバイタリティーに感服します。
- ・ 身近なところから防災について教えていただいてよかった。

- ・ 災害時（パニック状態時）に自分が行うこと、自分が出来る事、何をすべきか。
- ・ 素直に心にしみのお話でした。
- ・ 一言一言当たり前と感じられながら大切、貴重でとても感激いたしました。まわりの人たちにも知らせたいと心から思っています。ありがとうございました。
- ・ 地域防災の中核を担う人たちに伝えたいことを要点を立ててその要点に基づいて、具体的な活用事例を示してほしかった。論点が分散してたように思う。
- ・ 今までなかった講義でこの期に役立つと思われる。
- ・ 公助はあてにならない⇒再認識いたしました。
- ・ 阪神大震災でもご近所の方々に命を助けられた人は80%以上。常々のコミュニケーションが大切だと思います⇒共助
- ・ 自助は常日頃から心がける必要があります。
- ・ 日常生活密着の真摯な叫び、感謝のうちに聴いた。
- ・ 火災の場合の消火器の使用はするが、避難に対する問題を学んではと思う。
- ・ 日常の意識の大切さを知った。
- ・ 小さな積み重ねが大きな力になることを再認識できました。
- ・ 南部さんの実績を多く話してもらい、心が打たれました。これからも元気で頑張ってください。
- ・ 感動の一言につきる。
- ・ 三種の神器に感銘しました。
- ・ 身近なものに工夫を凝らして役立つ技は磨きたいものと思った。
- ・ すべて勉強になりました。気が付かなかった三種の神器と防災グッズの作り方などありがとうございます。
- ・ 全国区サミットでも先生の講義を聞いて三種の神器をいただきました。
- ・ 身近なことからというお話が大変参考になりました。各人が自分自身でよく考えることが大事だと思いました。
- ・ 実際に災害の現場をよく知った上でのお話しは大変参考になりました。
- ・ 何よりも熱意が伝わってきて刺激になりました。ありがとうございました。
- ・ 持ち出すもので一番大切なもの。三点を初めて知りました。身近に置く方法を教えていただいてよかったです。
- ・ 避難所で困った点「メガネ」「補聴器」「義歯」を持ち出せなかったという事実は大変参考になった。初めて聞いた具体的な話であった。災害発生に備えて日常的な避難訓練の繰り返しとは思うがどうしてもルー尔的に拘束された訓練であると思う。その地域、地域に合わせた避難のし方が本来の避難なのだということがよくわかり、認識を新たにしました。
- ・ 南部先生の講義はわかりやすく、具体的で勉強になりました。
- ・ 自助を第1にどう取り組むかを考えました。
- ・ 声を通らないのでせつかくのよいお話が後方ではききとりにくかった。ホワイトボードの活用もよいが、パソコンなどで図示していただければさらに良かったと思います。レジメもあればさらによく理解できたと思います。大切なお話しをありがとうございます。メガネ入れ、防災頭巾を早速用意します。
- ・ 大変心にひびく講座に感謝します。
- ・ 大変ためになりました。

- ・ 南部先生のお話しは具体的な内容が多く、とてもためになるお話しでよかったです。早速忘れないうちに実行したいと思います。
 - ・ 安心安全のためには日常生活の中でも多角的に知る必要があると思いました。
 - ・ 防災を多から考える方法を学んで、頭の体操ができた。色々の考え方があり、日々行動に移すことが学べた。
 - ・ 目からウロコのお話が満載で、すごくためになりました。ありがとうございました。
 - ・ 帰ってから家族で実行したい。
 - ・ 工作が楽しかった。
 - ・ ある物で色々役立つグッズ作り楽しかったです。お年寄りがないと困る入れ歯、メガネ、補聴器、確かになかったら困るものをいつも気にしないといけないと思いました。
 - ・ 避難所看板をよく見てみます。
 - ・ なんでもないことが防災の第一歩を教えていただきました。
 - ・ 真珠のはまぐりのお雛様すばらしかったです。
 - ・ 身に迫るお話しで心に残りました。
 - ・ 手作り防災グッズありがとうございました。
- 27年度からは次のような課題を意識して取り組みたい。
- ・ LODEの精神、ミッションに加え、南部やメンバーの言葉、さらには協力者の思いをまとめて、試行調査参加者に配布する。
 - ・ 試行調査参加者の感動の言葉を一人でも多く掬い上げ、それらをまとめて次なる参加者に伝えるべく、「感動したこと」、「誰かに伝えたいこと」、「あなたの防災活動への思い」等をアンケート調査する。
 - ・ これらを蓄積、集約していくことで、『LODEの精神』をより確かなものになるようにしていく。これも手法の標準化作業のひとつとして考える。

②LODEワークショップ運営の姿勢

①で述べたLODEの精神を参加者に伝えていくためには、紙媒体にまとめたものを配布するよりも、ワークショップの現場において、言葉と態度で伝えていくことが重要である。ここでは、どのような姿勢でワークショップの運営に当たるべきかについて、南部のワークショップ運営姿勢の分析をとおして次に整理してみる。

a) 水平目線であること

- ・ 子どもにも高齢者にも伝わる言葉と内容（「避難所の看板を描いて」、「高齢者三種の神器とは」、「自分が一番守りたいものは」等）。
- ・ 決して専門家ぶることなく、生活者として言葉を出す。
- ・ 恥ずかしがらずに方言を使う。

b) 自分の言葉で自分自身の思いを伝えること

- ・ 悲しかったこと、感動したことを自分の言葉で伝える。
- ・ 伝聞形ではなく、「自分はこう思う」ということを素直に話す。
- ・ 自分自身の被災体験や救援活動体験などの実話を話す。

c) 手先を動かせることで参加者の緊張をほぐし、発言しやすい環境をつくる

- ・ 「高齢者三種の神器箱」や「新聞スリッパ」、「ほのぼの灯」など、の工作。
- ・ 手話で各自自己紹介した後に、誕生日順に全員を整列させる。
- ・ 特定の誕生月の人に挙手させて、テーブルリーダーに指名する。

d) 協力者の人々に光を当てる

- ・ 社協など関連団体の方や民生委員、活動に協力してくれた方、行政職員などは会場で全員紹介する。

e) 緊張する場面をつくる

- ・ 予告なしに仕事を指示する（例：〇〇さん、みんなのポストイットの答えを並べてその傾向や特徴を報告してください等）
- ・ 災害がやってくるのと同じように、突然WSの指示を発表する（例：今、地震が発生しました。避難勧告が出されました。みなさん、自宅から図上で避難してください等）

f) ホットとできる場面や空気をつくる

- ・ 被災地炊き出し体験のぜんざいコーナーや焼き餅コーナーの設置
- ・ ジョークなどで笑いを誘う（例：私は飛行機に乗るときは73歳だが、いつもは37歳だ等）

g) 参加者を感動させる（共感を生み出す）

- ・ 例えば、「乳幼児アタッチメントを利用した障害者向け防災頭巾」を製作し、その意味を説明することで、障害児を持つ親はもちろん、子を持つすべての親の心を揺さぶる。

このように整理したからといって誰でもすぐに南部のような進行ができるとは限らないが、南部の表現方法を知ること、自分ならどのような表現方法を採用するかを考える手がかりになるものと思われる。

また、a) やc)、f)などは（場合によってはb) やg)なども）、一般的な講習会などの雰囲気とは全く異なる親しみやすさ、敷居の低さを感じさせるために有効な方策であると思われるが、こうした部分が『赤福もち型手法（楽しい内容と真剣で高度な内容とがセットになっていることから、甘い餡子で餅を包んでいる赤福もちになぞらえた呼称）』の餡子部分に相当するものである。

③LODEワークショップ運営の手順

当プロジェクトの達成目標は、LODEの標準的手法の開発である。そしてその技術的な中心要素のひとつとなるのはLODEワークショップの実施・運営手順である。

26年度の半年間では、子ども関連4カ所（参加者は最少15名～最大55名）、マンション1カ所（参加者25名）、一般地区2カ所（参加者45名、35名）、全町域1カ所（参加者50名）の計8カ所でプレ試行調査を実施したが、その結果をもとに検討を加え、次のa)～f)に27年度第一次試行調査に生かすべき案をまとめた。

しかし一方で、「手順」だけに意識や心血を注ぎ過ぎると硬直化に陥る危険性がある。一般住民の中で普及し息づくためには、絶対に手順の硬直化は避けるべきである。

従って、LODEとして安易に変更すべきではないところと、適宜変更して支障ないところを説明した“柔軟に活用できる標準モデル”を検討しなくてはならない。

a) 図上ワークショップの規模と会場

図上ワークショップの規模は、会場内の一体感（私たちのコミュニティなんだという実感を感じられること）を得られることが重要である。同じ団地だからといってあまりにも規模が大きいと一体感が得られにくい。団地やマンション住棟など適度な範囲を一つの単位として実施することが望ましい。

図上ワークショップでは1班（1テーブル）数名（理想は会話が班内での成り立ちやすい5～6名、最大でも10名程度まで）で、A全版の図面を囲みながら行う。班はいくつでも可能だが、ファシリテーターがコーディネートしやすい規模は数テーブル（多くとも10テーブル程度まで）だろう。

b) 図上ワークショップのファシリテーター

LODEワークショップでは次のように2人以上、できれば3人以上のファシリテータ体制で臨むことが好ましいと考えられる。

●メイン

- ・ LODEの目的・精神を伝える役
- ・ 全体の進行役（単なる司会ではない）

●サブ

- ・ 情報を伝える役
- ・ 情報に関して具体的な説明・解説を加える役

●記録・観察者

- ・ 録音・録画、メモ、板書等による整理
- ・ 最後のまとめ発表役

26年度のプレ試行調査においては、メインは南部、サブはプロジェクトメンバーの橘や協力者である伊丹市社協K氏などが務めたが、参加者人数が多くなる場合にはさらに「サブのサブ」的役割の人員を各テーブルに、或いは2テーブルで一人などの割合で配置したい。

また、メインとサブがたまに漫才のような掛け合いができると、参加者の緊張をほぐし本音を発言しやすい環境づくりが進む。

c) 手順のモデル（基本LODEのうちマンションのケース）

平成26年度のプレ試行調査における図上ワークショップは、常に南部がメインのファシリテータを務め実施してきた。

南部の場合は、当日会場で参加者の顔ぶれ（年代層、性別、雑談しているときの話題など）を眺めながらその日の進め方を考え、アレンジして行う。

しかし、LODEを全国に普及させるためには、やはり標準的な進め方を提示することが不可欠である。

標準的な進め方を提示すると、それだけが独りでに歩き出す危険性もあるが、①で述べた「LODEの精神」や②で述べた「LODE実施に求められる姿勢」を打ち出していくことで、「心のないマニュアルの暴走」には陥らないように努めたい。

当プロジェクトチームでは、LODEのモデル手順（マンションのケース）を次のように考えてきた。

【LODE（ロード）図上ワークの手順（マンションのケース）】

- ・ 先ず地区地図上で、地形やインフラ情報、避難所や公衆電話などの情報を凡例シールで貼り込む。
- ・ 次に準備したマンション戸割簡易立面図の各戸に、凡例に則してシールを貼っていく（高齢者、子ども、障害者、その他要援護者、頼れそうな人、ペット等）。
- ・ 住民情報が埋まったら、火事や地震、津波などの災害の発生をシミュレーションする（発生日時、その日の天候や気温、風向きなど、なるべく細かく想定）。

マンション図面上での立面避難に加え、地区地図上での平面避難の経路をシミュレーションする。

- ・ 想定・設定された被害状況・与件のなかで、迅速かつ安全に避難できる方法をグループごとに話し合い、結果を各グループ代表者が発表する。

【続いて5年後LODE作業に着手する】

- ・ 既に住民情報の貼り込まれたマンション戸割図の上に透明なビニールシートを被せる。
- ・ ここで、「5年が経過したとして、“5年後には援護が必要な可能性がある方”と“5年後には頼れそうな人”の凡例シールを貼り込んでいく。
- ・ 出来上がった“5年後の図”をもとに、「要援護者予備軍的な住民のいる住戸の確認」、「将来に住民のお世話役にまわってもらいたい人（例えば現時点の子ども）の発見や確認」、「住民が元気そうではあるが、逆に公的な支援の目によるチェックが入りづらい住戸の発見や確認」などの作業を行う。

【作成したマップ情報の管理】

- ・ マップの情報は、コミュニティの代表（自治会長）などが保管し、安易に個人情報が出ないように取り扱う。

これに対し、プロジェクトAD（アドバイザー）からは、次のような手順の仮説を整備し、その仮説のもとに実証実験（試行調査）を行うことで、より強力に標準化に向けた取り組みとするようアドバイスがあった。

- ・ LODEワークショップを「3回シリーズ」で取り組むようにし、例えば次のようなステップで開催する。

表5 27年度のLODEの取り組み手順案（3回シリーズ）

想定される開催・取組みの内容	
第1回目WS実施	<p>【LODEのLOD(脆弱性)を評価してみる】 住棟の模式図と凡例シールをつかって「いざとなれば支援が必要な人」について情報共有を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Little : 乳幼児や子ども ・ Old : 高齢者 ・ Disabled : その他特別に配慮が必要な人たち ・ その他 (ペットなど)
第1回目WS成果報告	<p>第1回目WSの情報を整理してご報告します。 そのもとに第2回目WSの実施内容についての検討を行います。</p>
第2回目WS実施	<p>【LODEのEを体験してみよう】 「〇〇までみんなで避難してみよう」：具体的な課題をとおして対策を考えてみます。とりわけ要援護者の避難行動で問題となる点なども確認していきます。この他、周辺地域との協力や対応が必要な課題も見えてくるかもしれません。</p>
第2回目WS成果報告	<p>第2回目WSの結果を整理してご報告します。 そのもとに第3回目WSの実施内容についての検討を行います。</p>

	す。
第3回目WS実施	<p>【5年後LODEにトライしてみよう】</p> <p>第1回目WSで作成したLODEマップをもとに、“5年後を想定したLODEマップ”の作成にトライしてみます。</p> <p>この狙いは、“潜在している脆弱性”と“今後に向けて内在する可能性”を発見、認識することにあります。</p>
第3回目WS成果報告	<p>第3回目WSの結果を整理してご報告します。</p> <p>そのもとに成果報告会開催内容に関する検討を行います。</p>
成果報告会(公開)	<p>マンションの全住戸に案内をして、今年度一連の取り組みの成果報告会を開催します。</p>

d) 手順のアレンジ（一般地区向け、子ども向け、障害者家族向け等）

c) での検討は「基本LODE」をマンションで実施することを想定したものである。一般住宅地区や子どもを対象としたワークショップ、或いは障害者（障害者を抱える家族）を対象としたワークショップなどでは、それら対象に向けて必要なアレンジを施すことが求められる。

●基本LODE：一般住宅地区ワークショップの場合

- ・ 地図は地域の住宅地図だけでいいが、学校区のような広い範囲で取り組む場合には、地域全体図に加え、自治会・町内会の班程度のエリア（数十戸くらいか）を拡大した地図を用意することも必要だろう。

●補完LODE：子ども向けワークショップの場合

- ・ 大人用の凡例では複雑すぎるので、後期高齢者や前期高齢者ではなく「寝たきりの方」、「体が不自由そうな方」、「一人暮らしのお年寄り」、「赤ちゃん」、「小さな子ども」、「妊婦さん」、「外国の方」程度の分類が適していると思われる。
- ・ また、犬や猫などペットのことを詳しく尋ねることで、子どもの関心を引きつけることも試したい。

●補完LODE：障害者（障害者家族）向けワークショップの場合

- ・ 26年度は障害者向けのLODEワークショップは実施できなかった。しかし、障害者支援施設などでのヒアリングを重ね、次のような認識を持つに至った。
- ・ 障害の種類や程度にもよるが、東北の場合でも障害を持つもの同士が助け合うケースが多かったようだ（障害者のことは同じような障害を持つ者や家族が一番よく知っている）。
- ・ 従って、障害者LODEでは、やや広い地域を把握できる（自治体全域など）地図を用いて、いざという時の頼れる施設や仲間の存在を確認するところから始まると思われる。
- ・ その次には「公的な支援施設や避難施設がどの程度対応してくれるか、どの程度頼れるか」を具体的に話し合うこととなる。南海トラフ震災などの巨大災害などの場合には当然不足が生じるはずで、そうした場合に命をつなぐことのできる「私設避難所」をどこに確保できるか、またそのために必要な設備やマンパワーはどの程度か等を話し合うことになるとと思われる。
- ・ この障害者向け（障害者とその家族）の調査或いはワークショップは27年度に実施する。

e) 準備物

- 地区の地図

男性、前期高齢者女性、未就学児、その他の未成年、その他の成人)

- ・ 次にその年代シールの上に部分的に重なるように状態シール（要援護と目される、頼れそう等）を貼る。

この改善によって情報の混乱はある程度防止できると考えている。

●要援護者のことを説明するパワポ資料とプロジェクター

LODEはとりわけ要援護者対応を目指す防災ワークショップ手法である。しかし、市民の多くは（場合によっては防災の専門家も）要援護者のことをよく知らない。

「平均的なコミュニティにはどの程度の人数の在宅要援護者が住んでいるのか」や「子ども、高齢者、障害者など、各々の要援護者が抱えている不安点とはどのようなところか」についてより認識を促し、図上ワークショップに向かう意識を高めることが必要である。

そのため図上ワークショップに着手する前に、要援護者に関する情報提供の時間を設けることが必要だ。

L : Little People (子ども)

- ★赤ちゃん (人口千人当たり約 8人)
- ★未就学年代の幼児 (人口千人当たり約 40人)
- ・小学生 (人口千人当たり約 50人)
- ・【参考 中学生】 (小学生の半分程度の人数)
- ★「発達障害児」という問題

ASD 自閉症スペクトラム Autistic Spectrum Disorder	★ 自閉症 ★ 知能は高いが自閉気味で対人関係やコミュニケーションに問題	●文科省調査では推定60万人(児童生徒の6.5%) ●幼児まで含めると100万人か(人口千人当たり8人)
ADHD 注意欠陥多動障害 Attention Deficit Hyperactivity Disorder	★ 注意力欠如 ★ 衝動性 ★ 多動	●グレーゾーンまで含めるとさらに増加
学習障害 Learning Disabilities	特定分野の学習に困難を抱える	

<注>
左記資料の各人数は、2013年国勢調査における年齢別人口の数字をもとに、住民が覚えやすいように概数として表示したものである。
赤ちゃんは0歳児の人口、未就学年代幼児は1～5歳の人口、小学生は6～11歳の人口で計算した。

図6： 要援護者説明資料の一例（子ども）

O : Old People (高齢な方々)

- ★在宅で要介護の方々 (人口千人当たり約20人～)
- ★在宅で要支援の方々 (人口千人当たり約 8人～)
- ★要介護・要支援ではないが、“予備軍”だと思われる方々
→400万人以上は認知症予備軍
(人口千人当たりでは30人～)
- 運動 (1年以内に転んだ、15分以上歩けない、何かにつかまらなると立てない)
- 口腔 (硬いものが食べにくい、お茶を飲んでむせる)
- 栄養 (体重が半年で2～3kg減った)
- 閉じこもり (週に1回も外出しない)、うつ
- 認知症 (認知症予備軍は相当多数に上るとされる)

認知症は避難所生活での最大の課題となる

<注>
左記資料の「在宅要介護」及び「在宅要支援」の人数は、「介護給付費実態調査月報 (24年1月分)」をもとに計算し、住民が覚えやすいように概数として表示したものである。
また「予備軍」の人数は、NHK番組における認知症予備軍の数値等をもとに概算推計し、住民が覚えやすいように概数として表示したものである。

図7： 要援護者説明資料の一例（高齢者）

D : Disabled People (障害をもつ方々)

- ★**身体障害** (人口千人当たり約28人が在宅)
 - ・視覚
 - ・聴覚・平衡機能
 - ・音声・言語・咀嚼
 - ・肢体不自由
 - ・内部(人工透析、人工肛門、酸素ボンベ等)
- ★**知的障害** (人口千人当たり約3人が在宅)
 - ・ダウン症候群や自閉症なども原因のひとつ
- ★**精神障害** (人口千人当たり約22人が在宅)

避難ルートだけでなく、避難所生活が難しい。
東日本大震災では、作業所等が継続できないために居場所を失った障害者が少なくなかった。

<注>
左記資料の各人数は、平成25年版障害者白書による数値である。

図8： 要援護者説明資料の一例(障害者)

災害時対応が求められる要援護者の一例

- ★**難病(特定疾患)** (人口千人当たり約6~7人)
- ★**人工透析(内部障害)** (人口千人当たり約2人~)
- ★**酸素療法(内部障害)** (人口千人当たり約1~2人)
- ★**てんかん(精神障害)** (人口千人当たり約2人~)

てんかん患者は精神障害者保健福祉手帳の対象
避難所では発作が起これと問題にされやすい

- ★**IDDM: 1型糖尿病(20歳未満人口千人当たり約0.4人)**
- ★**その他慢性疾患(医薬品確保)**
- ★**アレルギー性疾患への対応(喘息の他、食事、動物等)**

- ★**ペットの世話**
- ★**外国人**

<注>
左記資料のうち特定疾患患者数は「疾患別医療受給者証所持者数」、人工透析者数は「日本透析医学会によるデータ」、酸素療法患者数は「日本医療機器テクノロジー協会によるデータ」、てんかん患者数は「日本神経学会HPによる数値」、IDDM患者数は「日本IDDMネットワークによる資料」をもとに、住民が覚えやすいように概数として表示したものである。

図9： 要援護者説明資料の一例(その他)

f) LODEの象徴的補助グッズの開発

南部が東北被災地で聴いた高齢者の声(「入れ歯を持たずに避難しても、避難所では何にも食べられない。食べられないと咀嚼しなくなる。咀嚼しないと唾液も出なくなるし、脳が衰えてくる。結局障害者や認知症高齢者のようになってしまう。」)を参考に開発したのが『高齢者三種の神器箱』である。日頃から就寝時に入れ歯、メガネ、補聴器、その他処方箋などを入れておいて、いざという時に貴重品として携行するためのものである。

この『高齢者三種の神器箱』に対する中高年代層の反応がすこぶるいい。①の精華町の事後アンケート結果からも読み取れる。

また、南部は3-2(3)①の障害者施設ヒアリングの後、障害者に対しても特別なグッズを開発した。『乳幼児アタッチメントを素材に活用した防災頭巾』である。

乳幼児アタッチメントとは、子どもが幼児の頃から使用している毛布やタオルケット、あるいは母親の馴染みの服などの匂いや感触に愛着をおぼえ、大きくなってもそれらを手放さなくなるような愛着グッズである。ぬいぐるみなどの場合も多い。こうした乳幼児ア

タッチメント（恋人さん等の別呼称あり）を素材にして、防災頭巾を縫うことで、重度な知的や精神障がいを抱える方が、災害に遭遇した時少しでも落ち着くことができるのではないか、南部はそう考えた。

この考え方には、福祉関係者の多くが賛同したり、或いは感嘆するが、ワークショップの場でこの話に耳を傾けている参加者の中にも感動している方が少なくないようだ。南部の“子を想う親心”が同様に子を持つ参加者たちの心に共感を呼んでいると思われる。

南部はこの他にもワークショップへの参加者の中に「周りの人を元気づけ、勇気づけ、感動させられる思いや経験」を持った人に着目し、こうした方々の思いを詩に表現し、和装丁を施したミニ詩本も作成している。このミニ詩本が数十冊、百冊と蓄積していくことで、「LODEの精神・心」の部分に関してもより多くの市民に伝達していけるツールになるものと考えている。



写真26～28：高齢者三種の神器箱（左）と乳幼児アタッチメント素材の防災頭巾（中）
参加者の思いや経験、生き様を詩で表現し和装丁したミニ本（右）

平成27年度は、子ども向けの象徴的防災グッズにも取り組みたい。現時点では『子ども防災LODE手帳』或いは『LODEカード』のような内容を想定しているが、これは伊丹市昆陽里ワークショップにおいて、自宅の住所や電話番号を知らない小学生（中高学年）があまりにも多いことに驚いたメンバーの大西から提案があったものである。

g) “赤福もち”型手法としての工夫

②でもふれたが、次のような親しみやすい（参加への敷居を下げる）メニューは是非とも取り入れたい。

参加者のタイプにもよるが、図上ワークショップの間に屋外調査や実際の避難行動体験などを挟むことも有効ではないかと思われる。また、コミュニティ祭りなど地域イベントを絡めることも一考に値すると思われる。

- 手先を動かせることで参加者の緊張をほぐし、発言しやすい環境をつくる
 - ・ 「高齢者三種の神器箱」や「新聞スリッパ」、「ほのぼの灯」など、の工作。
 - ・ 手話で各自自己紹介した後に、誕生日順に全員を整列させる。
 - ・ 特定の誕生日の人に挙手させて、テーブルリーダーに指名する。
- ホッとできる場面や空気をつくる
 - ・ 被災地炊き出し体験のぜんざいコーナーや焼き餅コーナーの設置
 - ・ ジョークなどで笑いを誘う（例：私は飛行機に乗るときは73歳だが、いつもは

37歳だ等)

④LODEワークショップの計画・準備（段取り）

今年度の8箇所のプレ試行調査の計画・準備の進め方に関して、当プロジェクトチームと実施先団体や関連団体（社協など）との関係に着目して、タイプ別に整理した。

図10（長太小学校、知多市教員団体、伊勢市宮崎連合町内会、箕面市萱野）のタイプは、現場団体代表者（または世話役）が発意者または窓口となり、当プロジェクトチームにLODEワークショップや防災講座の実施を依頼してきたタイプである。

図11～図14は、現場団体代表者と当プロジェクトチームとの間に社協職員などの現地コーディネータが介在して、企画・準備段階からコーディネート役を担うタイプである。

このうち、図11（精華町）は、まだ具体的な現場活動団体中心者たちの顔が見えていない段階のもので、コーディネーターが現場団体代表者（または世話役）の役割も果たしている。対して図12～図14は、現場の活動団体（自治会、子ども団体等）の意思が明確となっている段階のもので、現場活動団体、現地コーディネーター、外部支援者（当プロジェクトチーム）の三者の役割分担が可能である。

LODEの普及を考えた場合、今後増やしていくべきタイプは図12～図14のタイプで、中でも現場活動団体と現地コーディネーターの果たす役割が大きいと思われる図13や図14のタイプの現場で試行調査を重ねていくことが、新たな担い手を育成していくためにも重要だろうと考えられる。

27年度研究開発の取組みにおいては、当プロジェクトチームと現地コーディネーター、現場活動団体役員相互間のやりとりの経過記録を残し、より詳細な分析と手法標準化に向けた整理を行う。

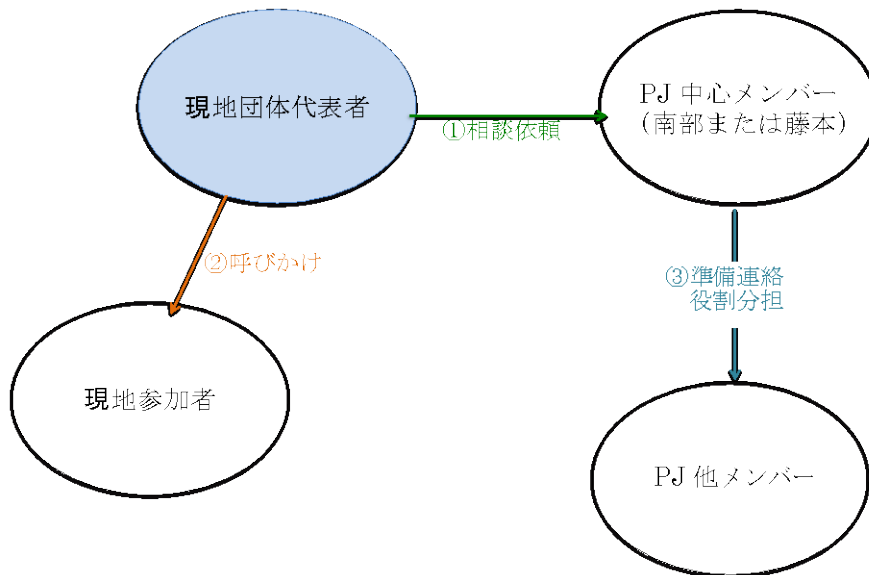


図10： 長太・知多・伊勢・箕面タイプ

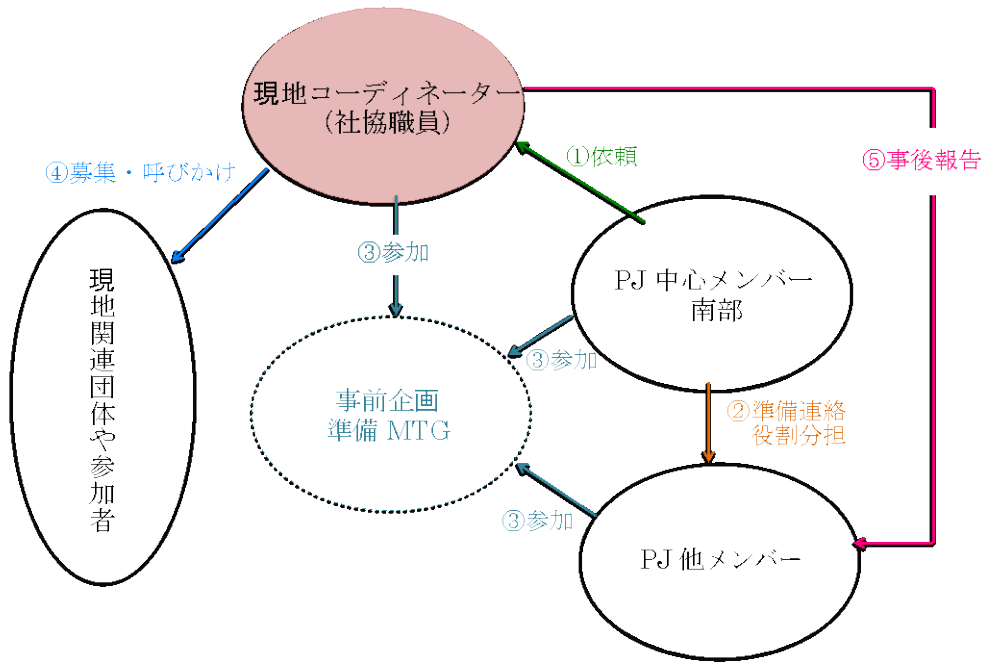


図11： 精華町タイプ

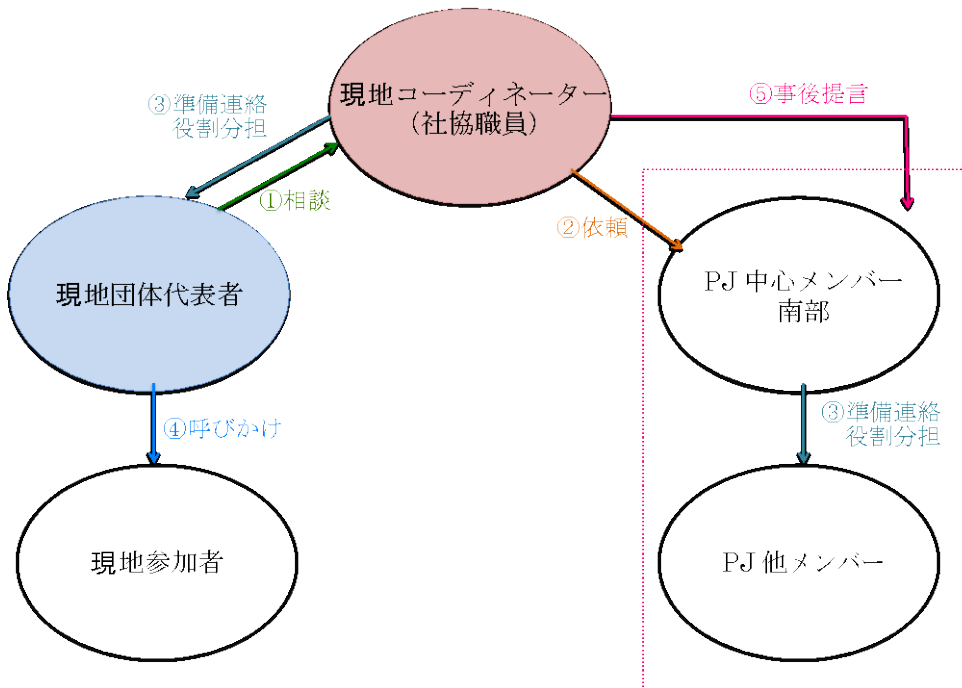


図12： 伊丹市せつよう地区タイプ

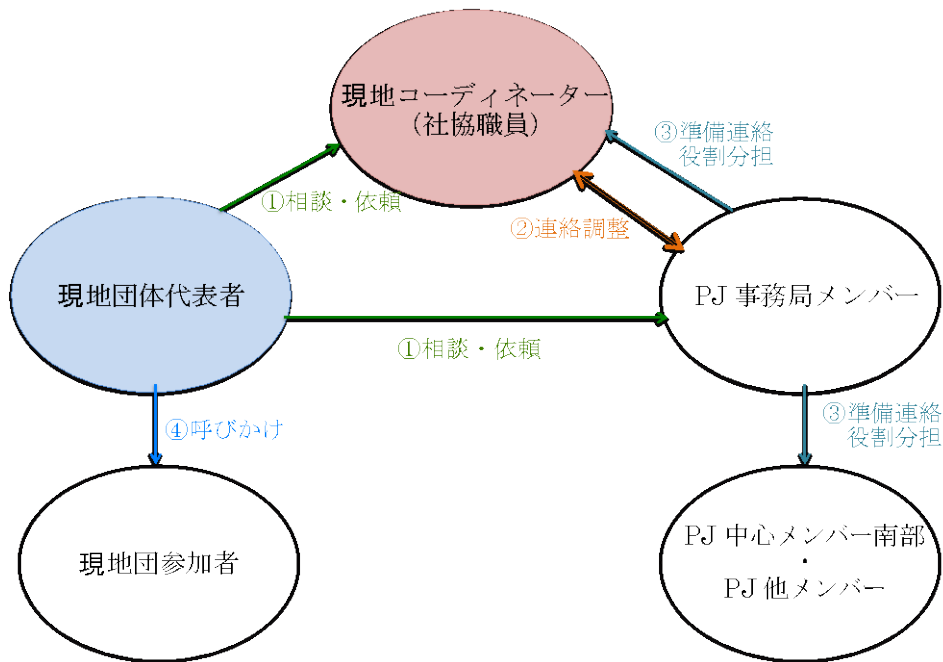


図13： 伊丹市サン伊丹タイプ

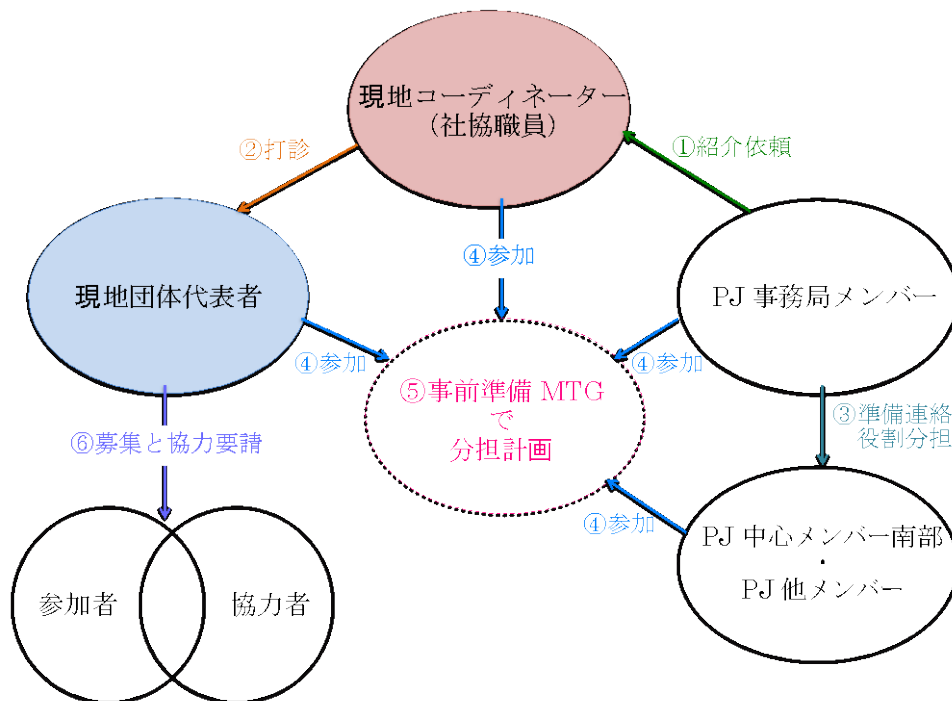


図14： 伊丹市昆陽里タイプ

⑤人材育成

平成26年度に実施できた「今後のLODE普及人材の育成のための取り組み」は次のとおりである。

今後各地域においてLODE普及を担ってもらえそうな人材は、以下に示すように、社協職員や現地団体リーダー計7名を確認することができた。

また、今年度の取り組みだけでは判断が難しいが、伊丹市せつよう地区の現地団体リーダー層4名、箕面市現地住民支援NPO職員数名、伊勢市現地団体リーダー層4名に関しても、今後の仕掛け方や訓練次第では、能力的には十分可能性を有していると思われる。

- 伊丹市せつよう地区（現場a）での実施に関するやりとりをとおして、コーディネート役を担った社協職員のLODEへの理解度は相当上がっている。今後この人材に関しては、図上ワークショップのコーディネート訓練を経験してもらいたい。
- 伊丹市サン伊丹（現場f）と伊丹市昆陽里（現場h）のコーディネート役を担った社協職員のLODEへの理解度は相当上がっている。またこの人材は、現場fのワークショップ当日、パワーポイントで活動の背景や来し方を説明する役割も担った。今後この人材に関しては、図上ワークショップのコーディネートを経験してもらうことで、地域で中心的な役割を果たすLODEコーディネーターに成長する可能性を有している。
- 伊丹市サン伊丹（現場f）の現地団体代表者1名と伊丹市昆陽里（現場h）の現地団体役員3名は、今回の実施をとおして相当なコーディネート力や企画力、気配り力を有しているものと感じられた。27年度には、前述の社協職員と一緒に図上ワークショップのコーディネートを経験してもらうことで、LODEコーディネーターに成長する可能性を有している。
- 精華町（現場g）を企画・コーディネートした社協職員も有望な人材である。27年度はワークショップの中で説明役や図上ワークショップのコーディネート訓練を経験してもらうことで、LODEコーディネーターに成長してもらいたいと期待している。

⑥LODEワークショップにおける各種データの調査・集計・分析

26年度のプレ試行調査8箇所のうち、図上ワークショップ調査結果データを集計し、初期の分析を試みることができたのは、基本LODEマンションタイプの「伊丹市サン伊丹」の現場であった。

ここでは、1年前にも、原初型のLODEワークショップを今年度と同等の規模で実施していたことから、今年度の集計データと昨年度の集計データを比較してみることができた（小数点以下データが生じるのは、A棟データは2班による平均、B棟データは3班による平均データのため）。

表6：サン伊丹駅前ハイツでの図上WSデータの集計結果

サン伊丹駅前ハイツA棟（79戸）の 図上ワークショップにおける 要援護者等のデータ	（参考）H26.02.02 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数	H27.02.22 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数
	後期高齢者に関する情報数（件）	24.5件
前期高齢者に関する情報数（件）	31.5件	21.0件
子どもや障害者に関する情報数（件）	8.5件	6.5件
その他心配な居住者に関する情報数（件）	2.0件	1.5件
頼れそうな居住者に関する情報数（件）	21.0件	24.0件

計	87.5件	80.5件
---	-------	-------

サン伊丹駅前ハイツB棟（92戸）の 図上ワークショップにおける 要援護者等のデータ	（参考）H26.02.02 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数	H27.02.22 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数
後期高齢者に関する情報数（件）	10.0件	16.7件
前期高齢者に関する情報数（件）	40.3件	46.0件
子どもや障害者に関する情報数（件）	16.7件	24.7件
その他心配な居住者に関する情報数（件）	1.0件	2.0件
頼れそうな居住者に関する情報数（件）	34.3件	44.3件
計	102.3件	133.7件

集計データから、1年前と比べて住民の意識や認識の状況に変化はあるかどうか、その変化は主にどのデータに関してか等を推察することはできるが、それ以上詳細な分析は、図面に書き込まれたデータをもとに現在の実状との突き合わせ作業をしなければ多くを語ることは難しいと思われる。

平成27年度は、LODEワークショップを実施する現場で、その事後に図上情報と実際との突合作業ができるように働きかけ、さらに一歩踏み込んだデータの分析にチャレンジするが、各コミュニティの現場では比較的高年齢層のリーダーが多く、詳細なデータ分析には関心を持たない場合が少なくない。

LODEは住民の自助・共助意識の醸成を目指し情報の共有化を図るための手法である。住民意識づくりに向けては、比較的単純なデータ整理作業を住民代表や現地コーディネータたちと共同で行うことが、LODE普及人材の育成にもつながるものと考えている。

また、地図上の要援護者に関するデータだけが研究上必要なデータではない。

例えば、26年度プレ試行調査（現場h）において、「小学校高学年の子どもの中には自宅の住所や電話番号を覚えていない子どもが相当数存在する」ことを確認したが、これは「子どもの自助力」という観点から深刻な問題が存在する可能性があることを示唆している。

子どもが“災害時に助力になってくれるかもしれない存在”ではなく、むしろ“震災迷子が多発発生してより大きな足手まといになるかもしれない存在”であることを物語っているからである。

こうした実状や、子どもLODEによって改善される状況等を調査・数値データ化し、世に問いかけることには大きな意味があると考えている。

子どもLODE以外でも、このように“重要な問題点やその改善状況などをクローズアップするためのモノサシ”を発見していかなければならない。

3 - 4. 会議等の活動

表7：実施体制内での主なミーティング等の開催状況

年月日	名称	場所	概要
平成26年	コアメンバーミ	伊丹市社協	・当プロジェクトの協力者の所属

10月7日	ーティング 及び現地協力者 ミーティング		する伊丹市社協地域福祉担当の方々と、今後の伊丹市におけるワークショップ・調査などの計画や進め方などについて意見交換を行った。
平成27年 1月3日	PJ合同会議	伊勢市二見浦 賓日館	<ul style="list-style-type: none"> ・ADからは「研究」に意識を持ち、手法仮説の設定とその評価のための調査方法を急ぐようにアドバイスを受けた。 ・住民参加型手法として、住民の関心を引きつけ、親しみやすさを感じてもらうための工夫も手法の中に位置付けるべきとの結論に至った。
平成27年 1月12日	コアメンバーミ ーティング（兼 WS事後反省会）	伊勢市 宮崎連合会館	<ul style="list-style-type: none"> ・1月3日の会議で話題となった「住民の関心を引きつけ、親しみやすさを感じてもらうための工夫」を持つ手法のことを、南部の三重県にちなんで『赤福餅型手法』と名付けることとした。 ・図面作業が中身のお餅部分なら、飲食や工作活動、屋外調査などはお餅に甘さを付加する餡子部分ではないかという整理を行った。 ・2月7日の箕面市、3月14日の精華町などでの試行調査実施や、障害者施設へのヒアリング調査実施についてもその計画を行った。
平成27年 2月7日	現地協力者ミ ーティング	伊丹市 市民まちづく りプラザ	<ul style="list-style-type: none"> ・伊丹市社協K氏より紹介を受けた「スポーツクラブ21こやのさと（地域子供活動団体）」の役員方々と、3月に実施予定の子供向けLODEワークショップ調査の企画会議を行った。
平成27年 2月22日	PJ合同会議（兼 WS事後反省会）	伊丹市 東有岡センタ ー	<ul style="list-style-type: none"> ・伊丹市サン伊丹でのワークショップ調査終了後、その反省会を行った。 ・ADからは1月3日に引き続き、「研究」のための手法仮説の設定とその評価のための調査方法を急ぐようにアドバイスを受けた。

			<ul style="list-style-type: none"> ・また、今回のワークショップのデータ整理も急ぐようにとアドバイスを受けた。 ・協力者の延藤安弘教授からは毎回のWSにおけるまとめ(ファシリテーショングラフィックス)の重要性の指摘を受けた。
平成27年 3月28日	PJ合同会議(兼WS事後反省会)	伊丹市 アイ愛センター	<ul style="list-style-type: none"> ・伊丹市昆陽里でのワークショップ調査終了後、その反省会を行った。 ・今後の「障害者向けLODE」の企画に生かすべく、障害者センター(デイサービス)の見学も行った。 ・会議後、メンバーより高齢者向けの「三種の神器箱」、障害者向けの「乳幼児アタッチメント利用による防災頭巾」に相当するような子供向けの防災関連グッズ(意識啓発グッズ)の考案が必要になるとの提案があった。

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

平成26年度は、研究開発の取り組みが緒に就いたばかりであり、現時点において活用・展開すべき研究成果を得ているとは言い難い。

したがって、現段階においてここで報告すべき内容は無い。

5. 研究開発実施体制

(1) 岩手県立大学グループ

①倉原宗孝(岩手県立大学総合政策学部、教授)

②実施項目

- ・被災地におけるヒアリング調査
- ・「第一次試行手法」検討のためのプレ試行調査(監理・分析)
- ・「第一次試行手法」検討のための追加調査(監理・分析)
- ・プロジェクト合同会議による「第一次試行手法」の設計

(2) 特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿グループ

①南部美智代(特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿、理事長)

②実施項目

- ・ 被災地におけるヒアリング調査（実査同行）
- ・ 「第一次試行手法」検討のためのプレ試行調査（企画・実査）
- ・ 「第一次試行手法」検討のための追加調査（企画・実査）
- ・ プロジェクト合同会議による「第一次試行手法」の設計

6. 研究開発実施者

代表者・グループリーダーに「○」印

表8：研究グループ名：岩手県立大学

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発 実施項目
○	倉原宗孝	クラハラム ネカタ	岩手県立大学総合 政策学部	教授	統括／全体にわたる調 査・分析
	金野 万里	キンノ マ リ	SAVE IWATE もりおか復興支援 センター	事務局長	被災地及び県内の地域 情報／調査対象の設定 ／調査
	福田 由美子	フクダ ユ ミコ	広島工業大学 建築工学科	教授	研究開発全体における 分析・アドバイス
	加藤 勝	カトウ マ サル	盛岡市	政策調整 係長	被災時及び復興時の各 種情報／政策・制度立 案
	中須 正	ナカス タ ダシ	独立行政法人・防 災科学技術研究所	主幹研究 員	各種災害情報の提供／ 調査／分析などの検証
	野中 里菜	ノナカ リ ナ	岩手県立大学 総合政策学部	M1	調査・分析補助／連 絡・調整
	室岡 夏実	ムロオカ ナツミ	岩手県立大学 総合政策学部	学生	調査・分析補助／連 絡・調整
	橘 宜孝	タチバナ ヨシタカ	みんなが龍馬塾	コーデ イナー	被災地調査実査及び分 析

表9：研究グループ名：特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発 実施項目
○	南部美智代	ナンブ ミチヨ	特定非営利活動法 人災害ボランティ アネットワーク鈴	理事長	グループ統括／LODE 方法論の構築／ 試 行調査WSの実施（講

			鹿		師) / 試行調査 (ヒアリング等) の実査
	藤本真由	フジモトマユ	生きる力を育む研究会	代表幹事 社会福祉士	LODE試行調査の協力先との実施調整 / 試行調査WSの実施 (補助講師)
	橋 宜孝	タチバナヨシタカ	みんなが龍馬塾	コーディネーター	LODE方法論の構築 / 試行調査WSの実施 (講師) / 試行調査 (ヒアリング等) の実査 / 試行調査の記録
	大西千佳	オオニシチカ	みんなが龍馬塾	コーディネーター	試行調査WSの実施 (補助講師) / 試行調査 (ヒアリング等) の実査 / 試行調査の記録
	森本馨	モリモトカオル	神戸市立西山小学校	教諭	試行調査WSの実施 (講師)
	山本進	ヤマモトススム	(社福)鹿追恵愛会 特別養護老人ホームしゃくなげ荘	理事 施設長	LODE試行調査WSの実施 (講師)
	倉原宗孝	クラハラムネタカ	岩手県立大学総合政策学部	教授	LODE方法論の構築 / 試行調査 (ヒアリング等) の実査分析

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

平成26年度は、研究開発の取り組みが緒に就いたばかりであり、研究開発成果として、現時点において発表・発信できるものは無い。

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

- (1) 書籍、DVD (タイトル、著者、発行者、発行年月等)
 - ・特になし
- (2) ウェブサイト構築 (サイト名、URL、立ち上げ年月等)
 - ・特になし
- (3) 学会 (7-4.参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
 - ・特になし

7 - 3. 論文発表

(1) 査読付き (0 件)

●国内誌 (0 件)

.

●国際誌 (0 件)

.

(2) 査読なし (0 件)

.

7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

.

(2) 口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

.

(3) ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

.

7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (1 件)

・毎日新聞（2014年11月7日全国版社会面掲載）

「頭上訓練 絆も強く」、「マンション 災害弱者守る」という見出しで、1／3ページ程度のボリュームの掲載となった。

しかしながら、この記事の取材が8月で、当プロジェクトがRISTEX研究開発プログラム「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」への採択前であったことから、当プロジェクトチームの研究開発協力・関与団体『生きる力を育む研究会』とその共同代表でもある南部美智代（災害ボランティアネットワーク鈴鹿理事長）が主な取材を受けたものであり、記事文中においてRISTEX研究開発プログラムへの言及は無い。

(2) 受賞 (0 件)

.

.

(3) その他 (0 件)

.

7 - 6. 特許出願

(1) 国内出願 (0 件)

.